

〈研究の概要〉

児童の実態として、自ら進んで課題解決に取り組んでいなかったり、課題解決の場で自分の考えだけにとどまっていたりする姿が見られた。授業の中で、課題意識をもち、解決に向けて積極的に考えることに課題があることが分かった。

そこで本研究では、課題改善に向けて、児童が社会的事象に興味・関心をもち、他者との対話の中で自己と他者の考えを比較しながら考えを選択・判断することで、課題解決を図る授業の工夫について研究を行った。

その結果、「問い」を活かした学習問題を設定することで、興味・関心をもち、社会的
事象に気付く児童が増えた。また、対話を通して、他者の考えをもとに複数の立場や取組
に気付き、思考を広げたり深めたりし、社会的事象を多角的に考える姿につながった。課
題解決に向けて他者の意見を取り入れ、多角的に思考する姿が見られた。

これらのことから、「問い」を活かし、考えを選択・判断する対話的な学びの工夫を通して、社会的事象を多角的に考える児童の育成につながったと考える。

〈研究のイメージ図〉



目 次

I	テーマ設定の理由	21
II	研究目標	21
III	研究仮説	22
1	基本仮説	
2	作業仮説 (1) (2)	
IV	研究構想図	22
V	研究内容	22
1	社会的事象を多角的に考える児童とは	
2	問いを活かし、選択・判断する対話的な学びの工夫について	
(1)	問いを活かしとは	
(2)	選択・判断する対話的な学びの工夫について	
①	選択・判断するとは	
②	選択・判断する対話的な学びの工夫とは	
VI	授業実践（第6学年）	25
1	単元の概要	
	単元名「ともに生きる暮らしと政治」（21時間）	
	小単元名「わたしたちの暮らしを支える政治」（6時間）	
2	本単元の指導と評価計画（全21時間）及び本単元に係る学習の系統	
3	本時の指導	
(1)	目標	
(2)	授業仮説	
(3)	本時の展開	
VII	結果と考察	27
1	作業仮説(1)の検証【結果】【考察】	
2	作業仮説(2)の検証【結果】【考察】	
VIII	成果と課題	30
1	成果	
2	課題	

《主な参考文献》

社会的事象を多角的に考える児童の育成

～「問い」を活かし、考えを選択・判断する対話的な学びの工夫を通して～

那覇市立高良小学校教諭 酒井 守礼

I テーマ設定の理由

急速に社会が変化し、子供たちを取り巻く環境は予測困難なものとなっている。情報化・グローバル化による膨大な情報が溢れる社会を生き抜くために、社会的事象を多角的に考え、現実社会の諸課題を協働的に追究し解決する力が求められている。

小学校学習指導要領は、多面的・多角的に考える力の育成を重視している。小学校学習指導要領解説社会編(以下、解説社会編)では、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりする力、考えたことや選択・判断したことを適切に表現する力を養う」ことが示されている。この力を育むためには、「問い」を活かすことで社会的事象に興味・関心をもち、対話の中で自己と他者の考えを比較しながら考えを選択・判断することが必要であると考え。

本学級の児童は、令和7年度沖縄県児童生徒質問紙調査「社会の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ」の質問に対し、85.2%が肯定的回答をした。しかし、「社会の勉強は好きだ」の質問では、肯定的回答は62.9%であったことから、社会に出たら役に立つということは分かっているが、全体の約4割が、興味・関心が低いということが分かった。

また、事前アンケートでは「これまでの授業では、課題解決に向けて、自ら進んで考えていますか」や「課題解決に向けて、自分の考えをもつときには自分の考えと友達の考えを比べたいと思いますか」の質問に対し、肯定的回答はそれぞれ85.2%であった。しかし、実際の児童の実態として、課題解決に向けて、自ら進んで取り組んでいなかったり、対話の場で自分の考えだけにとどまっていたりする姿が見受けられた。これまでの実践を振り返ると、「問い」を見いだし課題解決を図る授業構成を行ってはきたが、単元を通して課題意識をもち、解決に向けて積極的に試行錯誤する児童は限られ、学習の深まりに限界が見られた。

以上のことから、授業の中で課題意識をもち、解決に向けて積極的に考えることに課題があることが分かった。課題改善のためには、児童が社会的事象に興味・関心をもち、対話の中で自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、課題解決を図る授業の工夫が必要であると考えた。

そこで本研究では、「問い」を活かし、考えを選択・判断する対話的な学びの工夫をすることで、社会的事象を多角的に思考する児童が育成されと考え、本テーマを設定した。

II 研究目標

社会的事象を多角的に考える児童を育成するために、「問い」を活かし、考えを選択・判断する対話的な学びの工夫を実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

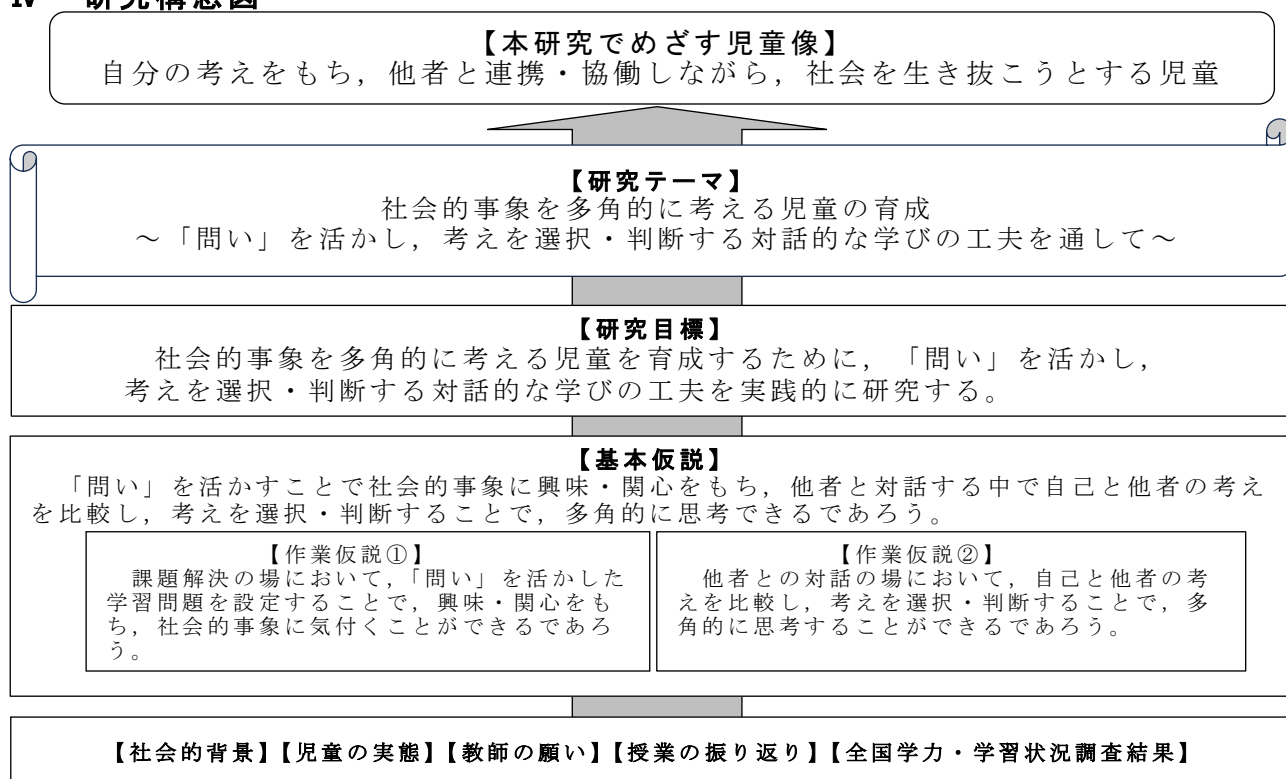
1 基本仮説

「問い」を活かすことで、社会的事象に興味・関心をもち、他者と対話する中で自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、多角的に思考できるであろう。

2 作業仮説

- (1) 課題解決の場において、「問い」を活かした学習問題を設定することで、興味・関心をもち、社会的事象に気付くことができるであろう。
- (2) 他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、多角的に思考することができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 社会的事象を多角的に考えるとは

解説社会編において、教科の目標を「小学校社会科における『思考力、判断力』は、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力である」と示している。また、多角的に考えるとは、「児童が複数の立場や意見を踏まえて考えること」と示している。これらのことから、社会的事象を一方向からではなく、多角的に考える力を育成する必要があると考える。

多角的に考える力を育成するにあたって、宗實(2025)は、小学校6学年の社会科授業では教師が児童の学習内容と中学校以降の学びのつながりを見通すことが大切であるとしている。学びのつながりを体系的に捉えてみると、中学校で考察する力へ結び

つけるためには、複数の立場や意見を踏まえて多角的に考える力を指導していくことが必要不可欠であると考え（表1）。

表1 「解説社会編付録資質能力一覧」を参考に「社会的事象を多角的に考えることの体系表」筆者作成

多角的に考える力とは			
第3・4学年		第5・6学年	中学校
生活の様子の変化などを考える力	人々の願いや努力・先人の働きなどを考える力	複数の立場や意見を踏まえて多角的に考える力	社会的事象自体が様々な側面をもつ多面性と、社会的事象を様々な角度から捉える多角性を踏まえて 考察する力

社会的事象について、宗實は、
「社会の中で起こる人間に関わる出来事や現象」を指し、具体的に「①人間に関する事象(ヒト)、②人間の行動に関する事象(コト)、③人間を取り巻く環境に関する事象(モノ)」と述べている(図1)。このことから、社会的事象は3つの側面から捉えられることが分かる。また、
「社会的事象には『見えるもの』と



図1 宗實の「社会的事象の分類」を参考に「社会的事象の分類表」筆者作成

『見えないもの』があり、相互の関係を捉えることが重要です。」と述べている。つまり、見える事実や現象の背後には隠れた意図や目的、意味があるため、社会的事象を多角的に考えることが重要である。

よって、本研究では、社会的事象を多角的に考える力を育成するため、様々な事象を関連させながら複数の立場や意見をもとに多角的に考える力を育む授業を展開していく。

2 「問い」を活かし、考えを選択・判断する対話的な学びの工夫について

(1) 「問い」を活かしとは

澤井(2015)は、社会的事象について、「そもそも社会的事象というものは、子供から最も遠い場所にあり」「子供はそうした人ごとの問題について、問題解決を通じて徐々に身近な距離に引き寄せていく」と述べている。また、「問い」があってはじめて、児童はその「問い」を解決しようと動き出すとしている。そして、身近な距離に引き寄せていくためには、「問い」を活かし、「問い」をどうつくるかが社会科授業の肝であるとしている。

また、宗實(2025)は、社会科の授業づくりとして「問題解決的な学習プロセス」を用いた授業を展開することを示している(図2)。そして、児童がこの学習プロセスを通じて資質・能力を身に付けて

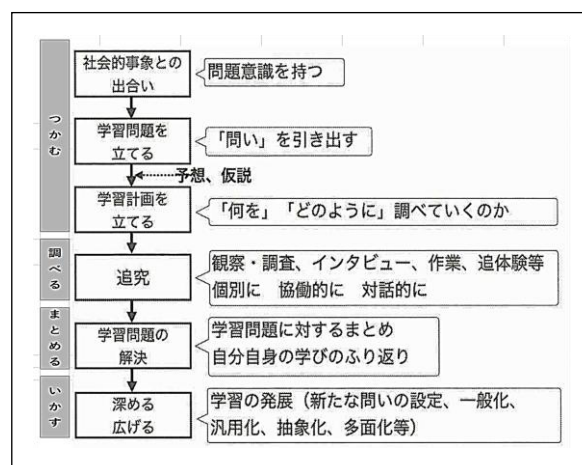


図2 宗實(2025)「問題解決的な学習のプロセス」

いくことが重要であるとしている。さらに、全員で解決すべき学習問題が設けられたとしても、児童が追究したい「問い」とは結びつかないことがあるため、全体の学習問題を立てるプロセスを通して、それぞれの児童の「問い」が十分に尊重され、その価値が認められている必要があるとしている。これらのことから、社会科において児童の学びを成立させるためには、児童に全体の学習問題と自分の「問い」との関連を自覚させ、その価値を尊重することが不可欠であると考ええる。

そこで本研究では、「問題解決的な学習のプロセス」の「つかむ」を重視した授業を展開する（図2）。「つかむ」の「社会的事象との出会い」「学習問題を立てる」「学習計画を立てる」という学習の流れを重視することで、児童が全体の学習問題と自分の「問い」との関連を自覚することができると考える。また、「問い」をもち解決しようとすることで、興味・関心をもち自ら考え、社会的事象に気付くことができると考える。

(2) 考えを選択・判断する対話的な学びの工夫について

①考えを選択・判断するとは

解説社会編では、「社会への関わり方を選択・判断する」とは、「社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分たちに協力できることなどを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断すること」と示されている。また、様々な立場から「こうした事実を学んだ上で、私たちはどうすればよいか、これから何が大切か、今は何を優先すべきかなどの問いを設け、取組の意味を深く理解したり、自分たちの立場を踏まえて現実的な協力や、もつべき関心の対象を選択・判断したりすること」と示している。

これらのことから、児童は様々な立場から「何が大切か」「今は何を優先すべきか」「自分にできることは何か」などについて、自ら考えていく必要がある。さらに、自ら興味・関心をもった社会的事象を根拠や理由とし、考えを形成させていかなければならないと考える。

そこで、社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、毎時間の「問い」で、学習問題を解決するために、「何が大切か」について自らの考えを選択・判断させる学習活動を展開する。

②考えを選択・判断する対話的な学びの工夫とは

解説社会編では、「根拠や理由を明確にして、社会的事象について調べて理解したことや、それに対する自分の考えなどを論理的に説明できるように養うことが大切である」と示されている。そのため、自ら調べた社会的事象や自分の考えの根拠や理由を話し合う学習活動が必要である。

澤井（2019）は、「選択・判断する場面は、学んだことを使う場面でもある。『選択』は選ぶことなので、多様な意見や解釈の中から自分の判断で選ぶことができるようになるためにも、対話的な学習活動は不可欠なものである」と述べている。つまり、単一的な視点にとどまらないよう、多様な意見や解釈の中から考えを選択・判断する対話的な学びを工夫することが重要であると考ええる。本研究においては、対話の場を児童が意見を交流し、相互に考えを深め合う場としたい。

そこで本研究では、他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、社会的事象を多角的に考える力を育んでいく。

VI 授業実践(第6学年)

1 単元の概要

単元名	大単元「ともに生きる暮らしと政治」(21時間) 小単元「わたしたちの暮らしを支える政治」(6時間)
内容の まとめ	現代社会の仕組みや働きと人々の生活に関する内容(解説社会編 P100～106) (1)ア(イ)国や地方公共団体の政治は、国民主権の考え方の下、国民生活の安定と向上を図る大切な働きをしていることを理解すること。 イ(イ)政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して、国や地方公共団体の政治の仕組みを捉え、国民生活における政治の働きを考え、表現すること。
単元の目標	(1)地方公共団体の政治の働きについて理解するとともに、統計などの各種資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身につけるようにする。 (2)地方公共団体の政治の特色や生活との関連や意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会への関わり方を考え、考えたことを説明したり、それらをもとに議論したりする力を養う。 (3)地方公共団体の政治の働きについて、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、日本の将来を担う国民としての自覚を養う。
社会的な 見方・考え方	・社会的現象を位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々の相互関係などに着目して捉え、比較・分類、総合したり地域の人々や国民生活と関連付けたりする視点や方法を働かせる。

2 「単元の指導と評価計画(全6時間)」及び「本単元に係る学習の系統」

学習の系統 (前)	「国土の自然とともに生きる」(5学年)
--------------	---------------------



時	ねらい(◎)・学習活動(■)	(分類) 「問い」を活かした 学習計画	□指導上の留意点	【評価項目】(評価方法) 【★】指導に生かす評価 【☆】記録に残す評価 (発)=発言・発表、(行)=行動観察、(ノ)=ノート、(ワ)=ワークシート、(C)=Canva
第1時 課題把握 1・つかむ	◎単元のめあてをつかむ。 ■非常食セットについて「問い」をもち、政治の働きが関連していることに気付く。 ◎児童の「問い」から学習計画を立てる。 ■本校避難時の様子と東日本大震災の避難の様子の写真を比較する。 ■東日本大震災の概要を知り、「被災した人々はどのような願いがあるのか」という「問い」を、時間の経過を追いつながり分類して学習計画を立てる。 ■「問い」を活かし学習問題をつくり学習問題の答えを予想して書く。	(心のケア) ・家族や友達に会いたい ・またいつ起こるか不安 ・家族やペットを返してほしい 学習問題 どう守る？わたしたちの命とくらし～災害に立ち向かう政治の力～	□非常食セットに表示されている文字から「問い」を出し合うことで、那覇市の働きが関連していることに気付かせる。 □児童の予想した願いを比較・分類し、時間の経過に着目させ、学習問題や学習計画を設定することができるようにする。 □自主避難は自分の命を守る行動につながることに気付かせる。	【☆態①】学習問題について予想や学習計画を立て主体的に追究しようとしている。(発)(行)
第3時 課題追究 調べる	◎被災地に対する支援を調べ、災害で被害を受けた国民の生活を守る政治の働きを捉える。 ■緊急の支援が、どのような立場や仕組みにより実現したか調べる。 ■大切だと思った事象に黄色付箋、対話で出あった友達の考えに青色付箋を貼付、思考を可視化する。 ■対話で再考した考えをまとめる。	(緊急の支援) ・何でも良いから食べたい ・暖かい布団で寝たい ・お風呂に入りたい ・電気・水道・ガスが早く復旧して欲しい	□第2時で予想した願い「問い」を想起させ課題を把握させる。 □市・国や県、他市町村に支援要請し、様々な機関が協力しながら支援活動を行ったことに気付かせるよう関係者に着目させる。 □迅速に被災地に支援物資を届ける仕組みや政治の働きを捉えられるようにする。	【★知①】被災地に対する支援から、災害で被害を受けた国民の生活を守るための政治の働きを捉えている。(発)(ノ)
第4時 課題追究 調べる	◎市や市議会の働きを調べ、復興を進める政治の働きを捉える。 ■港の改修、仮設校舎の建設など復興への取組を調べる。 ■「復興まちづくり基本計画」が作られるまでの過程を調べ、取組や計画づくりで大切なことを考える。 ■第3時と同じ流れで付箋活用。	(復興) ・安全に暮らしたい ・元の生活に戻りたい ・家を直したい ・仕事をしたい ・自由な暮らしを取り戻したい	□第2時で予想した願い「問い」を想起させ課題を把握させる。 □写真から人々の暮らしが少しずつ元に戻っていることを読み取らせ、事象に着目させる。 □取組は法律や条例に基づき行われ、市、県、国の他、市民の協力も重要と気付かせる。	【★知①】市役所や市議会の働きから、住民の願いをもとに復興を進めていくための政治の仕組みや働きを捉えている。(発)(ノ)(C)
第5時 課題追究 (本時)	◎釜石市の災害に強いまちづくりを調べ、市や県、国による政治は、復興を進めるうえで大切な働きをしていることを捉える。 ■復興に向けて行われた事業や継続して行われている取組を調べ、災害に強いまちづくりに大切なことを考える。 ■第3時と同じ流れで付箋活用。	(まちづくり) ・もう地震が起きないでほしい ・災害からまちを守りたい ・災害に強いまちをつくりたい	□第2時で予想した願い「問い」を想起させ課題を把握させる。 □写真から復興したまちづくりを読み取らせ、事象に着目させる。 □災害に強いまちづくりを行うためには、市・県・国による取組とともに、地域の助け合いや自分や家族を守る取組も大切であることを捉えさせる。	【☆思②】政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して、「問い」を見いだし地方公共団体の政治の働きについて考え、表現している。(発)(ノ)(C)
第6時 課題解決 まとめ	◎被災者の願いを実現する政治の働きについて調べてきたことをまとめ、問題解決における政治の働きが不可欠であることを捉える。 ■釜石市の問題や政治の働きについてまとめ、第3時の流れで付箋を活用し、政治と暮らしのつながりで、命とくらしを守るために最も大切だと思う箇所に黄色付箋を貼る。	(単元のまとめ) 学習問題 「どう守る？わたしたちの命とくらし～災害に立ち向かう政治の力～」の解決	□これまでの学習やキーワードを振り返り、キーワード以外にも、大切だと思った言葉があれば取り上げる。 □政治と暮らしとのつながりについて考え、対話的な学びを通して再構成した考えを、根拠を示しながら書くよう促す。	【☆思②】自分たちの暮らしと政治の働きのつながりについて考え、表現している。(発)(ノ)



学習の系統 (後)	第2大単元 日本の歴史 「国づくりへの歩み」(6学年) 公民的分野 「私たちが生きる現代社会と文化の特色」(中学校)
--------------	---

3 本時の指導（第5時）

(1) 目標

釜石市の災害に強いまちづくりを調べ、市や県、国による政治は、復興を進めるうえで大切な働きをしていることを捉える。

(2) 授業仮説

- ①課題解決の場において、「問い」を活かした学習問題を設定することで、興味・関心をもち、社会的事象に気付くことができるであろう。
- ②他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、多角的に思考することができるであろう。

(3) 本時の展開

段階	学習活動	□指導上の留意点 ◆予想される児童の反応	評価規準 【評価項目】 (評価方法)
導入 5分	1 学習問題と本時の問い(めあて)を確認する。 2 本時の問いの答えを予想する。 ペアで考えを交流する。 (個→ペア→全体)	☐ 第2時で予想した市民(被災者)の願いを確認する。 児童の「問い」から本時の学習計画が設定されたことを伝え、自覚をもたせる。 ☐ 被災時・復興1年後の写真を提示し、復興だけでなく、災害に強いまちづくりを進めることが必要であることに気付かせ、復興だけでいいのか揺さぶりを入れる。 ☐ 児童の予想を共有し、課題に対する見通しを持たせる。	
	学習問題 どう守る？わたしたちの命とくらし～災害に立ち向かう政治の力～		
	本時の問い 命とくらしを守るまちづくりで大切にしたいこと		
授業仮説① 展開 30分 授業仮説②	3 復興に向けて行われた事業や継続して行われている政治の取組を調べる。 (1)教科書や資料を基に調べる。 印象に残った事象(立場や取組)に黄色付箋を貼付し可視化する。 4 本時の問いの答えについて話し合う。 (1)自分の考えを共有する。 ①どんな取組あったか、グループで確認する。 ②友達の新しい考えに青色付箋を貼付し可視化する。 (2)自分の考えのキーワードをワークシートや付箋に書き、大切にしたいことを選択・判断する。理由をもって判断し、話し合う。 (グループ→全体)	◆二度と起こってほしくない。 ☐ これまで、どんな立場の人がいたか確認する。 ◆市長・県知事・大臣・被災者・自衛隊・ボランティアなど ☐ 「自分だったらどの事象を大切にしたいか」を考えて選択するよう学習活動を示す。 ☐ これまで釜石市が進めてきた取組や資料から自分たちの生活につなげて答えを書くように促す。 ◆国「災害に関する情報を地方公共団体に提供するよ。」 ◆被災者「まちの人々の命と安全を守るために、地域の避難訓練に参加する。」 ☐ なぜその答えになったのか根拠を示すよう促す。 ☐ 取組に着目したり、立場の視点で考えたり、立場を変えて考えたりしてよいと助言する。 ◆国や市だけでなく、自分たちもできることをやる必要がある(思考の多面性の示唆)。 【「努力を要する」状況と判断される児童への支援】 ☐ 市や県、国との関係図のワークシートを提示し、整理させる。矢印でつながりなどして思考を整理させる。何をしているのか取組に目を向けさせ、大切にしたいことを選択させる。	【☆思-②】 政策の内容や計画から実施までの過程、法令や予算との関わりなどに着目して、「問い」を見いだし地方公共団体の政治の働きについて考え、表現している。 (発)(ノ)(C)
終末 10分	5 まとめ・振り返り 本時の問いについて自分なりの答えをまとめる。	☐ 取組や立場と人々の願いと関連付けて、釜石市や日本全国の取組を振り返り、自分が大切にしたい事象を発表させる。 ☐ 「振り返りの視点(①立場②仕組み・取組③自分の考え)」を提示する。 ☐ 次時は、単元の「学習問題」を解決することを伝える。	

VII 結果と考察

1 作業仮説(1)の検証

課題解決の場において、「問い」を活かした学習問題を設定することで、興味・関心をもち、社会的事象に気付くことができるであろう。

【結果】

児童は、「被災した人々の願い」からの「問い」をもとに設定した学習問題「どう守る？ 私たちの命と暮らし～災害に立ち向かう政治の力～」について、単元を通して解決する学習活動を進めた。

アンケート結果から、「これまでの授業では、課題解決に向けて、自ら進んで考えていますか」の肯定的回答は6.8%増加し、「当てはまる」に着目すると、22.1%増加した（図3）。また、「社会の仕組みや政治について興味・関心をもっていますか」では、肯定的回答が20%増加した（図4）。肯定的に答えた理由として、「政治や社会の仕組みについて詳しく知ることができて楽しかった」

「政治は難しいと思ったけど政治について詳しく知ることができた」「この学習についてもっと深掘りしていきたい」「この学習は大切だと思った」との感想が多数あった。

児童は、第2時では、被災者の願いを想像する活動を通して様々な「問い」が生まれた。その「問い」を活かして学習問題を設定することができた。また、その学習問題をもとに、毎時間解決する「問い」から興味・関心をもち、複数の立場や取組などの社会的事象に気付ける児童が増えた（表2）。

そして、児童にとって身近な立場である警察や消防、自衛隊などの立場から、国や県、市などの仕組みや取組に気付いた。さらに、政治の働きや国や県、市などが連携・協力していることに気付くことができた（表3）。

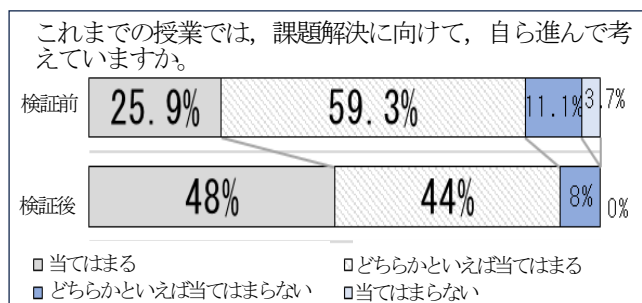


図3 アンケート結果

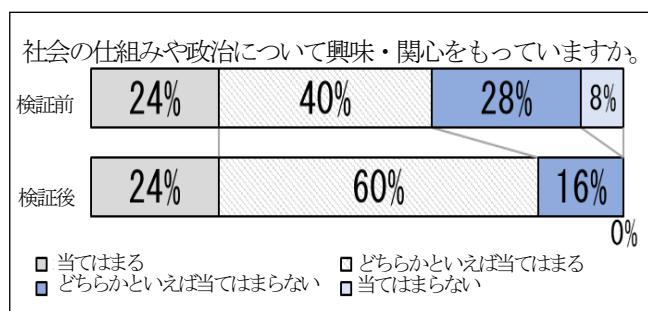


図4 アンケート結果

表2 社会的事象に気付いた児童（25名中）

	第2時	第3時	第4時	第5時 (本時)
気付けなかった(人)	6	5	2	0
気付いた(人)	16	20	23	25

表3 児童が気付いた複数の立場（延べ人数）（25名中）

	第2時	第3時	第4時	第5時 (本時)
警察や消防・自衛隊など(人)	11	9	0	0
国(人)	4	7	10	16
県(人)	1	6	8	0
市(人)	1	8	14	23
市民(人)	0	0	7	1
地域(人)	0	0	0	1
国・県・市全体(人)	0	4	7	15

A児は、毎時間の「問い」を解決するため、社会的事象について自ら調べていた。第3時と比べて本時（第5時）では、様々な社会的事象（ヒト・コト・モノ）に気付くことができていた（表4）。

【考察】

アンケート結果から、「問い」を活かし、学習問題を設定することにより、課題解決に向けて、自ら進んで考えることや、社会の仕組みや政治について興味・関心をもつことができたと思えられる（図3）（図4）。

児童の「問い」を活かした学習問題を設定し、学習問題と自分の「問い」との関連を自覚することで、「問い」の解決に向けて興味・関心をもち、社会的事象に気付くことができるようになったと考えられる。

また、児童にとって身近な立場である警察や消防、自衛隊などの社会的事象から、国や県、市などの仕組みや取組とした政治の働きや国や県、市などが連携・協力するなどの社会的事象について気付きが見られた。つまり、警察や消防、自衛隊といった身近な社会的事象を手がかりに、国や県、市の仕組みや取組による政治の働きや、それらが連携・協力する広がりのある社会的事象へと気付きを広げていた（表3）。

A児は、学習問題と自分の「問い」との関連をもとに、毎時間の「問い」を解決していく中で、「社会の中で起こる人間に関わる出来事や現象（ヒト・コト・モノ）」について、様々な社会的事象に気付くことができるようになったと考える。

以上のことから、課題解決の場において、「問い」を活かした学習問題を設定することで、興味・関心をもち自ら考え、社会的事象に気付くことができたと考える。

2 作業仮説(2)の検証

他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することで、多角的に思考することができるだろう。

【結果】

他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断する学習活動を行った。

アンケート結果では、「友達の考えを聞いてみたいと思いますか」の肯定的回答が14%増加した（図5）。「課題解決に向けて、自分の考えをもつときには自分の考えと友達の考えを比べたいと思いますか」の肯定的回答は6.9%増加し、全体の約9割を占める結果となった（図6）。また、肯定

表4 A児の社会的事象の気付き

第3時	・災害救助法について（モノ） ・災害対策法について（モノ）
第4時	・税金を補助金として使う（コト） ・アンケート（市民の意見）をもとにした計画作り（ヒト）（コト）
第5時（本時）	・災害発生したときに備えた体制をつくる（コト） ・災害に関する情報を提供（コト） ・安全取り組み（コト） ・津波防災教育（モノ） ・家や学校を高台にたてる（コト） ・防波堤・防潮堤（モノ）（コト） ・国・県・市は安全基準の見直しや災害に強いまちづくりをすすめている（ヒト・コト・モノ）

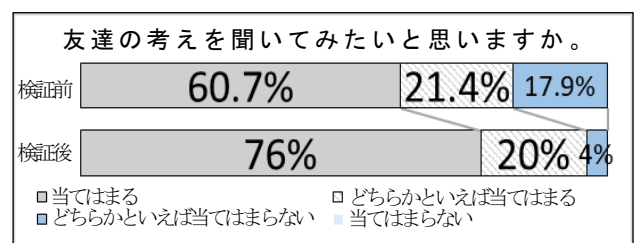


図5 アンケート結果

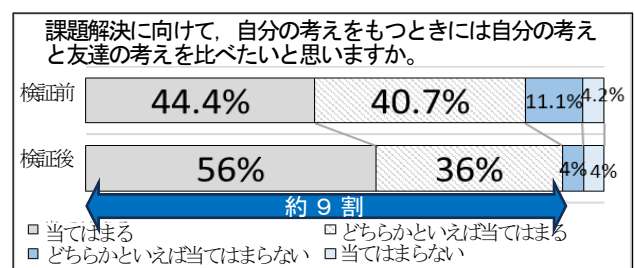


図6 アンケート結果

的に考えた理由として「最初の考えと、友達と対話した後の考えは違ったから交流は大切」や「友達と対話して『なるほど』と考えが広がった」「大切だと選択したことは友達と同じだったけど、理由が違って自分の考えが深まった」との感想が多数あった。

対話前にD児は、自ら調べた社会的事象から市の立場や取組について自分の考えをもっていた。その後、対話の場においてE児とF児と自ら話し合う姿が見られた。E児は県・国・地域の立場をもとに考えの根拠や理由を述べていた。また、F児においては、市の立場から、住民のことを尊重した考えを述べていた。D児は、これらの考えを自己の考えと比較することで住民の意思に基づいた考えや複数の立場からの助けが必要だという考えを取り入れていた。そして、社会との関わりについて、「みんなのことを意識したり、助け合いが一番大切」と、自らの考えを加えていた（図7）。

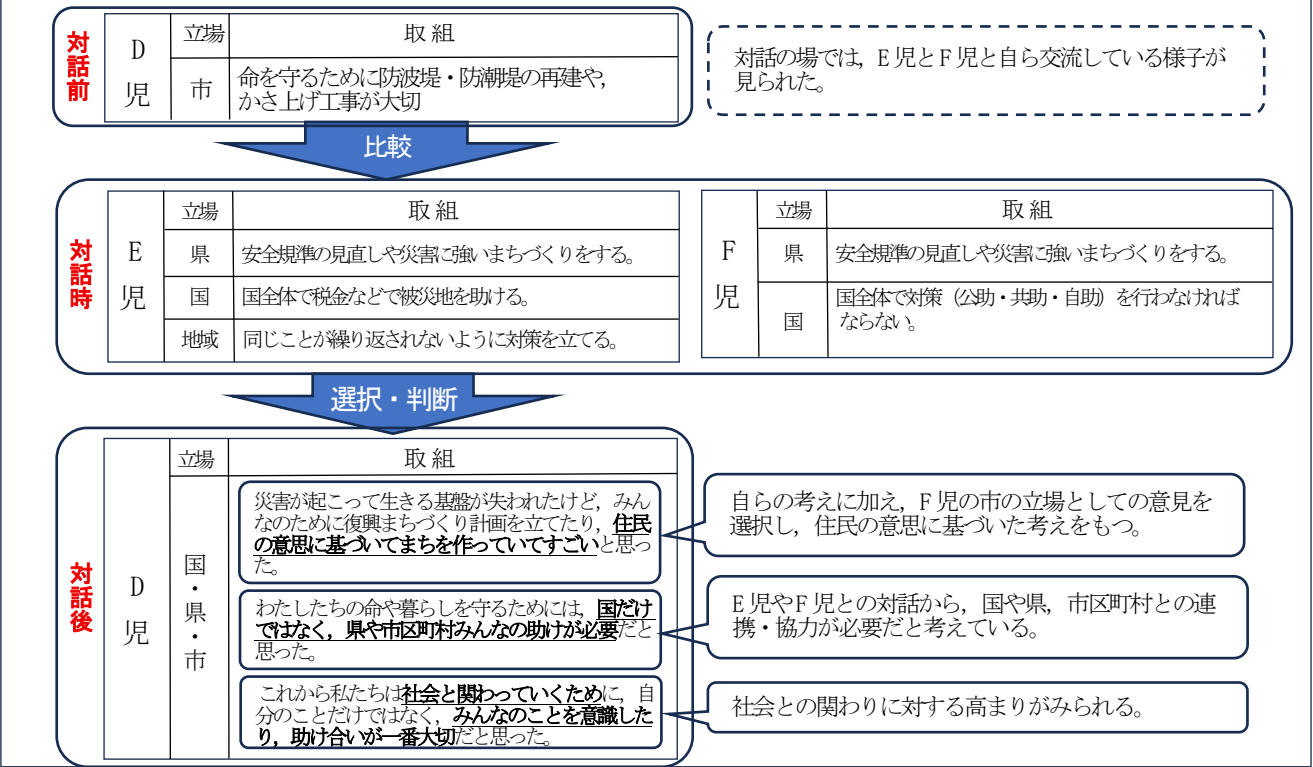


図7 D児の思考の流れ

G児は、第2時において、自衛隊や市の立場から考えていた。本時において、振り返りでは、複数の立場に気づき、公助・共助・自助が必要であることや海外に目を向けた考え、前単元とのつながり見いだした考えが書かれていた。また、社会との関わりについて自分の考えをまとめていた（図8）。

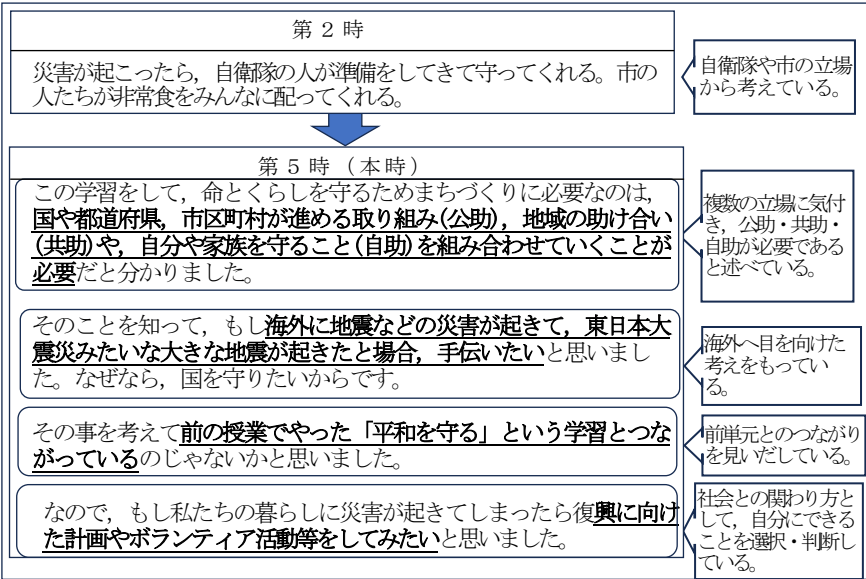


図8 G児の思考の流れ

【考察】

アンケート結果から、他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断する学習活動を通して、友達の考えに興味・関心が高まったことや自分の考えと友達の考えを比較したいという姿勢につながったと捉えられる。

D児は、意見を交わす中で、国・県・地域の立場や住民に対する思いの高まりに気付いたことから、多様な意見や解釈の中から、自分の判断で選ぶことができたという捉えられる。

G児の思考の流れを確認すると、自衛隊や市の立場のみの考えから、複数の立場に気付き、公助・共助・自助が必要であることや海外に目を向けた考え、前単元とのつながりを見いだすなど、多角的な考えが見られた。また、社会との関わりについて、社会的事象の仕組みや働きを学んだ上で、習得した知識などの中から自分にできることを選び出し、自分の意見や考えとして決めるなどして、判断することができたという捉えられる。

以上のことから、他者との対話の場において、自己と他者の考えを比較し、考えを選択・判断することは、社会的事象を多角的に思考する力の育成に有効であったと考えられる。

Ⅷ 成果と課題

1 成果

- (1) 課題解決の場において、児童の「問い」を活かした学習問題を設定することで、社会的事象による政治的な働きや関係について興味・関心をもち、様々な社会的事象を捉え、考える力が高まった。
- (2) 対話を通して、自己や他者の考えをもとに複数の立場や取組に気付き、多様な意見の中から考えを選択・判断することで、社会的事象を多角的に考えることができた。

2 課題

- (1) 児童は、複数の立場や取組に気付きながらも社会的事象の3つの側面（ヒト・コト・モノ）を関連させながら捉えることが曖昧であった。教師の支援として、社会的事象への気付きを価値付けし、自分の考えをもたせる必要がある。
- (2) 対話の場において、社会的事象に対する社会との関わりについての考えに深まりが見られなかった。児童の生活経験や既知の知識をもとに社会的事象に対する自分の考えを想起させる教師の手立てが必要である。

《主な参考文献》

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説社会編』	文部科学省	東洋館出版社	2017
『社会科の授業デザイン』	澤井陽介	東洋館出版社	2015
『社会科「個別最適な学び」授業デザイン理論編』	宗實直樹	明治図書	2025